いる。それで、本書が、高等学校や大学の教科書として、少しでも多くの人に見られる機会を得たいと願っている。頭注もそういう場合を考えて附したところが多い。

昭和二十五年四月二十四日

佐伯梅友

旧版の紙型がくたびれてきたので、改版することになり、改めて全部にわたって訂正の筆を加えた。これによって、少なからず誤りを正しえたのをうれしく思う。

上欄にはいりきらない注を巻末に集めたのは、ちょっと不便であるが、本文も頭注も活字を大きくした点は、読みやすくなったことと思う。

昭和五十一年八月九日

佐伯梅友

目次

凡例……三
本文
一　光る源氏の生ひたち（桐壺）……七
二　雨夜の品定め（帚木）……一九
三　夕顔（夕顔）……三〇
四　草のゆかり（若紫）……五六
五　もののけ（葵）……七七
六　雨のいたづら（賢木）……八七
七　わびずまひ（須磨）……九四
八　夢のつげ（明石）……九九
九　心のやみ（松風・薄雲）……一〇八
一〇　秘密（薄雲）……一三
一一　厳父（少女）……一三〇
一二　めぐりあひ（玉鬘）……一三九
一三　絵物語（螢）……一六五
一四　おそろしきむくい（若菜下）……一七二

一五　橋姫（橋姫）……一八三
一六　とはの別れ（総角）……一九七
一七　昔のあと（宿木）……二〇四
一八　人ふたり（浮舟）……二一四
一九　風のたより（手習）……二三三
二〇　道ひとすぢ（夢の浮橋）……二三五
注……二四五
源氏物語について……二六二
湖月抄本桐壺巻頭影印……扉裏
内裏の図……二六八
河内本若紫巻頭影印……二六五
清涼殿平面図……二六九
長恨歌……二六六

一　古今集のことばがきには、「貞観の御時」「仁和の御時」「寛平の御時」「深草のみかどの御時」「田村のみかどの御時」などの言い方が見える。いまは、「どのみ代であったかしら」の意で、「いづれの御時にか」とした。この下に「ありけむ」が省略されている言い方である。

二　この人は、地位は更衣、父は大納言であったということが、よんでゆくうちにだんだんわかるように書いてある。桐壺が局（つぼね）であったので、桐壺の更衣といわれる。→「み局は桐壺なり」（九頁）

三　「時めく」は、女の場合には、寵をうける、かわいがられる意に用いる。かわいがる意で「時めかす」（四二頁）ともいう。

四　後に出る一のみ子の女御（弘徽殿の女御）などである。

五　めざましきものとしての意。めざましは、目がさめるような心もちをいうので、よい場合にも用いるが、ここはわるい方で、しゃくにさわるという気もちになる。

六　前の「すぐれて時めき給ふ」のと同じほどの更衣、またそれより下﨟の更衣たちの意。

七　人をうらやませたり、ねたがらせたりして、心を乱れさせる意。→「人のみ心のうごきにけるを」（七八頁）

八　「人の恨みを受けることがかさなったためであったろうか。」あつしくなっていった原因をこう考えているところに、当時の人の考え方のかたはしが見られる。

九　病弱になっていってという意。あつし（形、シク活用）は病気で熱のあるありさま。

一〇　私宅に引きさがっていることが多い意。

一一　「お思いになって。」以下、みかどを主としていう。

三～三一～二四五頁の注へ。



# 光る源氏の生ひたち（桐壺）

いづれの御時にか、女御・更衣あまたさぶらひ給ひけるなかに、いとやむごとなき際にはあらぬがすぐれて時めき給ふ、ありけり。はじめよりわれはと思ひあがり給へる御かたがた、めざましきものにおとしめそねみ給ふ。同じほど・それより下﨟の更衣たちは、まして安からず。朝夕のみやづかへにつけても人の心をうごかし恨みをおふつもりにやありけむ、いとあつしくなりゆき、もの心細げに里がちなるを、いよいよかずあはれなるものに思ほして、人のそしりをもえはばからせ給はず、世のためしにもなりぬべき御もてなしなり。上達部・上人なども、あいなく目をそばめつつ、「いとまばゆき人の御おぼえなり。もろこしにも、かかることのおこりにこそ、世もみだれあしかりけれ」と、やうやう天の下にもあぢきなう人のもてなやみぐさになりて、楊貴妃のためしも引き出でつべうなりゆくに、いとはしたなきこと多かれど、かたじけなきみ心ばへのたぐひなきをたのみにて、交らひ給ふ。父の大納言はなくなりて、母北の方なむ、いにしへの人のよしあるにて、親うち具しさ

一 引き出して。「取り出づ」「思ひ出づ」「言ひ出づ」「見出づ」など、「出す」意に「出づ」ということが多い。
二 むちゃくちゃに見たがるので。
三 さしつかえないようなのを、少しは見せましょう。（でも、そうむやみに引っぱり出されては）、ひょっと体裁のわるいようなのでもあっては。「さりぬべき」は「さありぬべき」で、たしかにそうあることができるようなの意から、見せてもいいようなの、さしつかえないようなのの意となる。↓「あるまじき恥もこそ」（一〇頁）
四 「うちとけてかたはらいたしとおぼされむ」が、体言扱いで、「その」はそれにかかる。
五 うちとけたので、見られては、そばではらはらされるようなのこそ、見たいのです。
六 ざらにあるようなこそ、見たいのです。
七 なむ」にかかる。
八 わたくしなどものの数ではありませんが。
九 ふみのぬしのめいめいが。
「怨ずれば」は、あとの「かたはしづつ見るに」にかかる。「やんごとなく……二の町の心やすきなるべし」は、かたはしづつ見る理由を説明して、はさみこんだもの。
一〇 大事なので、ぜひおかくしになるはずのなんかは。
一一 いいかげんな。
一二 第二流で、見られても気づかいのないふみなのだろう。
一三 源氏は中将と、ふみのかたはしずつ見ると。中将がうらむので、源氏は、中将に見せながら、自分も見る心もちである。中将の見るにまかせたのではない。また、気づかいないふみだとはいえ、一つのふみを、初めからしまいまで見せはしないのである。
一四～一六↓二四七頁の注へ。

どもを引き出でて、中将わりなくゆかしがれば、
「さりぬべき、少しは見せむ。かたはなるべきもこそ。」
と、ゆるし給はねば、
「その、うちとけてかたはらいたしとおぼされむこそ、ゆかしけれ。おしなべたる大方のは、数ならねど、ほどほどにつけて、書きかはしつつも見侍りなむ。おのがじし恨めしきをりをり・待ちがほならむ夕暮などのこそ、見所はあらめ。」
と怨ずれば、やんごとなく切に隠し給ふべきなどは、かやうにおほぞうなるみ厨子などにうち置きちらし給ふべくもあらず、深くとり隠し給ふべかゝめれば、これは二の町の心やすきなるべし、かたはしづつ見るに、
「かくさまざまなるものどもこそ侍りけれ。」
とて、心あてに、それか、かれかなど問ふ中に、言ひあつるもあり、もてはなれたる事をも思ひよせて疑ふもをかしとおぼせど、言ずくなにてとかくまぎらはしつつとり隠し給ひつ。
「そこにこそ多くつどへ給ふらめ。少し見ばや。さてなむ、この厨子も心よくひらくべき。」
と宣へば、
「御覧じ所あらむこそかたく侍らめ。」
など聞え給ふついでに、
「女の、これはしもと難つくまじきは、かたくもあるかなと、やうやうなむ見給へ知る。ただうはべばかりのなさけに、手はしり書きをりふしのいらへ心えてうちしなゝどばかりは、随分によろしきも多かりと見給ふれど、そもまことにその方を取り出でむえらびに必ずもるまじきは、いとかたしや。わが心えたることばかりを、おのがじし心をやりて、人をばおとしめなど、かたはらいたきこと多かり。親など立ちそひもてあがめて、生ひ先こもれる窓のうちなるほどは、ただかたかどを聞きつたへて心を動かすこともあゝめり。かたちをかしくうちおほどき若やかにてまぎるることなきほど、はかなきすさびをも人まねに心を入ることもあるに、おのづから一つゆゑづけてしいづるこ

大殿油〈土蜘蛛双紙〉

一 あなたのところにこそ。「源氏のことば。
二 見所のあるようなのは、めったにないでございましょう。「御覧じ所」は「見所」を敬語にした言い方。「かたし」はすぐつぎにも例があり、前にも「なずらひにおぼさるるだにいとかたき世かな」（一五頁）とあった。
三 なんくせがつけられそうもないのは。
四 見知りました。「給へ」の位置に注意。
五 深いことはなく、ほんのうわっつらだけの風流心で。
六 「よき」に対して「よろしき」は、まずまずいい、がまんできるという程度なのをいう。↓二五頁
七 それも。
八 筆蹟なり。こたえのしようなりについて、すぐれたものを取り出そうというえらびに、きっと落ちないだろうと思われるのは。「む」の連体形は仮定の気もちでやわらかな言い方をするのによく用いられる。後に用例がたくさん出ているから、注意して読もう。
九 自分の知っていることだけについて、めいめいとくいになって、（あれはだめだなんかと）人をわるくいいなど、そばにいて、いたたまらないことが多い。
一〇 「生ひ先こもれる」と「こもれる窓のうち」と、「こもれる」に二義をかけて解す。生ひ先がこもっているとは、その人の中に生ひ先がはいっている心もちで、年の若いのをいう。女がまだ年が若くて、おくふかいへやのうちにこもっているうちはという意。
一一 その人のもつ一部の才芸。
一二 おおようで。
一三 いそがしい家庭の雑事がない間。
一四 しあげる。